

主体的・協働的に学び続ける力を育む探究的な学習の在り方

—総合的な学習（探究）の時間での授業づくりを通して—

〈探究的な学習研究グループ〉

中村 希¹、高橋 司²、佐藤 祐司³、山岸 崇⁴、永野 孝雄⁵、奥山 香⁵、齋藤 未和子⁵
 大和町立大和中学校¹、大崎市立東大崎小学校²、気仙沼市立大谷小学校³、宮城県東松島高等学校⁴、
 宮城県総合教育センター⁵

【要約】 学習指導要領解説では、総合的な学習（探究）の時間の本質は探究的な学習であると示されている。本研究では、探究的な学習を充実させる手立てとして「探究的な学習 教師の3つのアクション」を提案し、総合的な学習（探究）の時間での授業づくりを通して、有効性を検証した。その結果、教員については、探究的な学習への理解の深まりや実践意欲の向上が確認できた。また、児童生徒については、主体的・協働的に学習に取り組む姿が見られたことから、探究的な学習を充実させるための手立てとして有効だと分かった。

【キーワード】 探究的な学習、主体的・協働的、総合的な学習の時間、総合的な探究の時間、指導計画

1 はじめに

これからの学校教育には、子供たち一人一人が社会の変化に主体的に向き合い、自らの可能性を發揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓く力を育むことが求められている。

平成29・30・31年告示の学習指導要領解説では、習得・活用・探究という学びの過程で深い学びが実現できているかという授業改善の視点が明記された。また、学習指導要領解説総合的な学習（探究）の時間編では、総合的な学習（探究）の時間の本質は探究的な学習の過程（探究の過程）であると示されている。このことを踏まえると、総合的な学習（探究）の時間は、「探究的な学習の指導のポイント」*1を理解した上で指導に当たることが必要であると考え。本研究では、総合的な学習（探究）の時間での授業づくりを通して探究的な学習の在り方について探っていく。

2 宮城県の探究的な学習について

(1) 国・県実施の調査

令和4年度全国学力・学習状況調査の総合的な学習の時間における探究的な学習の取組について尋ねた児童生徒質問紙（45）の結果は、「よくしている、どちらかといえばしている」と肯定的に回答した割合が小学校74.6%、中学校74.7%で、全国平均並であった。また、総合的な学習の時間における探究的な学習を意識した指導について尋ねた学校質問紙（33）の結果は、肯定的に回答した割合が小学校92%、中学校87.9%で、全国平均並であった。

この結果について、児童生徒質問紙と学校質問紙を比べると小学校、中学校の両方で10ポイント以上の差があるという点に着目した。さらに、学校質問

紙の肯定的な回答の内訳を見ると、「どちらかといえばしている」と回答した割合は小学校56.4%、中学校52.3%で、「よくしている」の割合に比べて多いことに着目した（図1）。

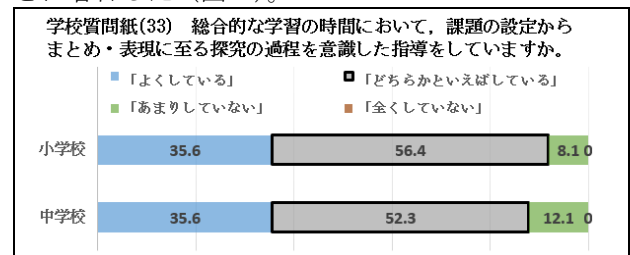


図1 「よくしている」と「どちらかといえばしている」の比較

また、生徒対象である令和4年度公立高等学校みやぎ学力状況調査において、課題を見付けたり解決したりする学習活動について尋ねた質問で、肯定的な回答をした生徒の割合は、1年生71.3%、2年生63.6%であった。

(2) アンケート調査

児童生徒質問紙と学校質問紙の差が見られることや「どちらかといえばしている」と回答した割合が多いことに着目し、総合的な学習（探究）の時間の指導について詳しい調査を実施した。アンケート調査は、本センター主催の研修会参加者（初任研2年目・中堅研・新任教務主任研）、長期研修員、所属校教員の計167名を対象に行った。

まず、総合的な学習（探究）の時間に探究的な学習を意識した指導を行っているかと肯定的に回答した割合は、77.9%と全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙（45）の結果に近い割合となった。

また、自身の指導、校内体制、探究の過程について、困っている、難しいと感じているところについて質問し、次の結果を得た（図2・3・4）。

なお、図2・3については回答の上位三つを取り上げた。

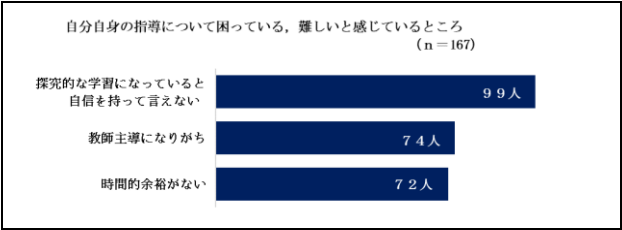


図2 自分自身の指導について（複数回答）

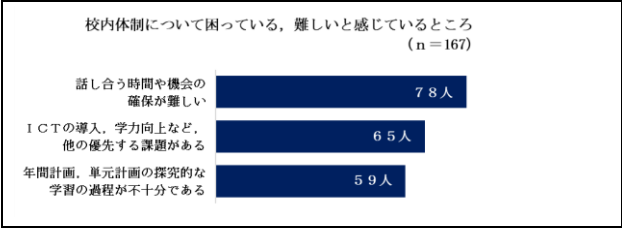


図3 校内体制について（複数回答）

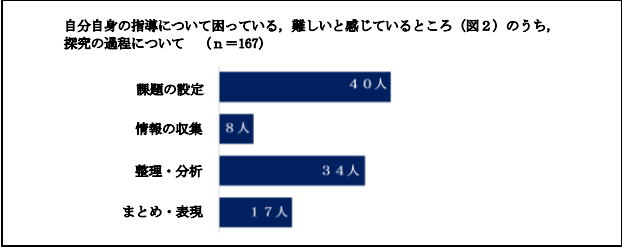


図4 探究の過程について（複数回答）

図2の質問では「探究的な学習になっていると自信を持って言えない」（99人）の他に「探究的な学習の過程に即した授業の進め方が分からない」（48人）「探究的な学習がどのようなものか分からない」（26人）という声も上がったことから、探究的な学習の理解が十分でないことが、指導に自信を持っていないことにつながっていると考えた。

図3の質問では「話し合う時間や機会の確保が難しい」（78人）、「年間計画、単元計画の探究的な学習の過程が不十分である」（59人）の他にも「教材研究や単元構想の仕方が分からない」（27人）という声も上がったことから、「探究的な学習の指導のポイント」に沿った指導計画の見直しが十分に行われていない状況であると推測できる。

図4の質問では、「情報の収集」と「まとめ・表現」に比べ、「課題の設定」「整理・分析」に難しさを感じるとの回答が多く見られる。探究的な学習では児童生徒が自ら課題を設定し、課題解決に向けて主体的に学習に取り組むことが重要となる。「課題の設定」「整理・分析」に難しさを感じていることと、図2の「教師主導の学習展開になりがち」と感じていることを合わせて考えると、児童生徒主体の学習にすることに難しさを感じているのではないかと考えた。

アンケート調査の結果から、本県の課題を以下のように捉えた。一点目は「探究的な学習の理解を確かなものにする」こと、二点目は「指導計画を探究的な学習の指導のポイントに沿って見直す」こと、三点目は「児童生徒の主体性・協働性を高めるような指導をする」ことである。

3 研究目標

本県の課題を基に以下の研究目標を設定した。
児童生徒の主体的・協働的に学び続ける力を育成するための探究的な学習の在り方を、総合的な学習（探究）の時間での授業づくりを通して明らかにし、探究的な学習を充実させるための手立てを提案する。

4 「探究的な学習 教師の3つのアクション」

(1) 県内の学校視察

探究的な学習を充実させるための手掛かりを探るため、探究的な学習を推進している県内の学校（小学校2校、中学校2校、高等学校2校）を視察した。視察を通して探究的な学習を進める上で効果的な取組や働き掛けがあることが分かった（表1）。

表1 効果的な取組や働き掛け

校内体制	・校内研修など共通理解の機会を設定していた ・総合（総探）担当、研究部、学年部等が組織的に計画し、運営に携わっていた ・地域の企業や団体と連絡調整を行う渉外担当教員を設置していた
指導計画	・探究の過程を踏まえ指導計画を作成していた ・児童生徒の興味・関心に沿った活動を設定していた ・課題を設定させるまでに時間を掛けていた ・体験活動が充実していた ・指導計画を毎年見直していた
働き掛け 教師の	・見取りを丁寧に行い、具体的な支援を計画していた ・見通しを持たせるための働き掛けを工夫していた ・言葉掛けやレポートづくりが丁寧に行われていた
地域連携	・役場や公民館等の公的機関と連携を図っていた ・地域のコーディネーターや人材を活用していた ・地域での体験活動が充実していた

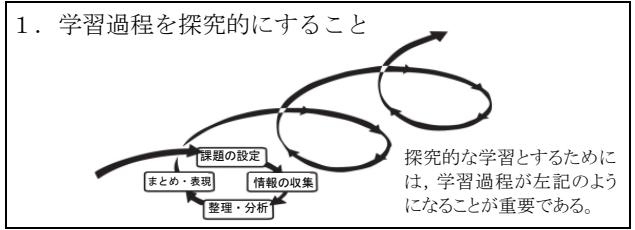
(2) 「探究的な学習 教師の3つのアクション」

視察で得た手掛かりを基に、本県の課題を解決するための手立てが必要と考え、「探究的な学習 教師の3つのアクション」を提案することとした。

① 「探究的な学習の在り方を『つかむ』」

探究的な学習の理解を確かなものにするためのアクションを「探究的な学習の在り方を『つかむ』」とした。探究的な学習の指導をするに当たり、学習指導要領解説が示す「探究的な学習の指導のポイント」を理解する必要がある。そのためには、校内研修会において教員間で共通理解を図ったり、所属校教員と協働による授業づくりを行ったりすることが有効だと考えた。「探究的な学習の指導のポイント」を表2に抜粋・整理した。

表2 「探究的な学習の指導のポイント」（学習指導要領解説 総合的な学習（探究）の時間編より抜粋・整理）



課題の設定	・児童生徒が自ら課題を持つということは、教師は何もしないでじっと待つということではない ・教師が意図的な働き掛けをする ・学習対象との関わり方や出会わせ方を工夫する ・体験活動で直接対象に触れさせ、興味や疑問を持たせる
情報の収集	・体験活動を通して、課題解決に必要な情報を収集させる ・体験活動の目的を明確にしながら自覚的に取り組ませる ・情報の種類(数値, 言語, 感覚)を意識した学習活動にさせる ・感覚的な情報は言語化するなど適切に蓄積させ、必要に応じて共有させる
整理・分析	・情報の性格ごとに整理させる ・「考えるための技法」(比較, 分類, 序列化, 類推, 関連付け, 原因や結果に着目など)を意識させる ・思考ツールで思考を可視化させ、整理・分析の質を高めさせる
まとめ・表現	・伝えるための具体的な方法を身に付けさせ、目的に応じて使うようにさせる ・相手意識や目的意識を明確にさせる ・情報を再構築させ、自分の考えや新たな課題を自覚させる
2. 他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること	
○多様な情報を活用して協働的に学ぶ ○異なる視点から考え協働的に学ぶ ○力を合わせたり交流したりして協働的に学ぶ ○主体的かつ協働的に学ぶ 協働的に取り組む学習活動を行うことが、児童生徒の学習の質を高め、探究的な学習を実現することにつながる	

② 「指導計画をより探究的に『みがく』」

指導計画を「探究的な学習の指導のポイント」に沿って見直すためのアクションを「指導計画をより探究的に『みがく』」とした。本研究においては、総合的な学習（探究）の時間の指導に当たる教員がすぐに実践できることを提案したいと考え、指導計画の見直しに焦点を当てた。

見直しに当たっては、児童生徒の実態と地域の特性を踏まえ、「探究的な学習の指導のポイント」と照らし合わせながら指導計画を立てていくことが大切となる。その際は、ねらい達成に向けて児童生徒が自ら学んでいくように計画することが重要となる。さらに、指導計画の作成に当たっては、児童生徒の

学習活動を多面的・網羅的に想定する必要があるため、協働による授業づくりが効果的であると考えた。

③ 「児童生徒の伴走者として『はしる』」

児童生徒の主体性・協働性を高める指導をするためのアクションを「児童生徒の伴走者として『はしる』」とした。主体性・協働性を高めるためには、教師は指導内容を教え込むのではなく、児童生徒から思いを引き出すことが大切と考える。その際は、児童生徒の活動の様子やつぶやき、振り返りシートの記述などから学習状況を丁寧に見取り、学習意欲を高めるような言葉掛けを工夫することが重要だと考える。また、友達の考えを聞いて多面的に考えたり、友達と力を合わせることで達成感を味わったりするなど、協働的に学ぶことの良さを児童生徒に実感させるように関わっていくことが大切だと考える。

④ 「つかむ」「みがく」「はしる」の関係性

以上の「つかむ」「みがく」「はしる」の3つのアクションは互いに作用し合いながら機能する。「つかむ」ことで、指導計画をより探究的なものにし、かつ児童生徒の伴走者としての関わり方を確かめることができる。「みがく」ことで、探究的な学習の在り方について理解が深まり、児童生徒の活動を予想した上での伴走が可能になる。伴走者として「はしる」ことで、教員の探究的な学習の理解につながると考えた。

5 所属校における実践

「探究的な学習 教師の3つのアクション」の有効性を探るため、研修員の所属校において授業づくりを行った（表3）。本報告書では一部の学校の取組を抜粋し、報告する。

(1) 「探究的な学習の在り方を『つかむ』」の実践 大崎市立東大崎小学校の実践

① 内容

次のように校内研修会を実施した（図5）。

表3 所属校での実践の内容（各学校で特に注力した取組を取り上げたもの）

	探究的な学習の在り方を「つかむ」	指導計画をより探究的に「みがく」	児童生徒の伴走者として「はしる」
東大崎小	・担任と「探究的な学習の指導のポイント」を確認した ・校内研修会で「課題の設定」の単元構想を練るワークショップを実施した	・担任と3年「福祉」の指導計画を見直した ・児童の主体性を引き出すために、直接体験をしたり、児童が自分の課題を再検討したりする機会を設定した	・実践授業で、児童の思いを引き出したり確かめたりする言葉掛けを行った
大谷小	・担任と「探究的な学習の指導のポイント」を確認した ・校内研修会で「課題の設定」の単元構想を練るワークショップを実施した	・管理職や研究主任、担任と4年「環境」の指導計画を見直した ・児童の学習意欲や必要感を高めるために、体験活動や外部講師の講話に至る過程を重視した	・実践授業で、児童の思いを引き出す言葉掛けを行った ・振り返りシートの児童の記述を見取り、その後の指導に生かした
大和中	・学年部の教員と「探究的な学習の指導のポイント」を確認した ・校内研修会で「探究の過程」に沿って単元構想を練るワークショップを実施した	・教務主任、学年部の教員と協働で1年「まちづくり」の指導計画を見直した ・生徒に課題を自分の事とさせるために、外部講師から話を聞く機会を設定した	・指導計画に示した生徒への言葉掛けや支援の方法について、学年部の教員が共通理解し、生徒の思いを引き出したり確かめたりする言葉掛けを行った
東松島高	・担任、研究企画部の教員と「探究的な学習の指導のポイント」を確認した ・校内研修会で抽出した生徒が今後行うであろう「整理・分析」をロールプレイングして、指導の方向性を探った	・研究企画部と2年次の「生徒の興味・関心に基づく課題」の学習を見直した ・より充実した個人探究とするために、他者と協働して主体的に取り組む活動を導入した	・実践授業で、教員がICT機器を活用し、情報収集の方法やWebサイトを示しながら、生徒への具体的な助言を行った

- 1 事前アンケート
- 2 探究的な学習について情報共有
- 3 単元の指導計画について説明
- 4 研究授業の成果と課題について
- 5 ワークショップ（課題の設定）

研修会での様子



図5 校内研修会の流れ

「探究的な学習の指導のポイント」について情報共有を図った後、研修員が授業を行った単元の指導計画に「探究的な学習の指導のポイント」をどのように取り入れているかを説明した。ワークショップでは、研修内容を踏まえて、5年「福祉」の単元での課題の設定場面について検討した。

② 結果と考察

ワークショップ後は、元の指導計画に比べて児童が興味・関心を高めていく過程が見えるような場面構想が作成された（図6）。実生活の中から問題を見いだしたり、高齢者について知るための体験活動を行う必要感を持たせたりする構成にするなど、参加者の探究的な学習への理解が深まったことがうかがえた。研修会後には、5年担任がワークショップで作成した場面構想を基に、授業を実践した。

以上のことから、校内研修会において「探究的な学習の指導のポイント」の共通理解を図り、課題の設定場面を練るワークショップを行ったことで、教員の探究的な学習の指導に対する理解が深まり、実践意欲の高まりを確認することができた。

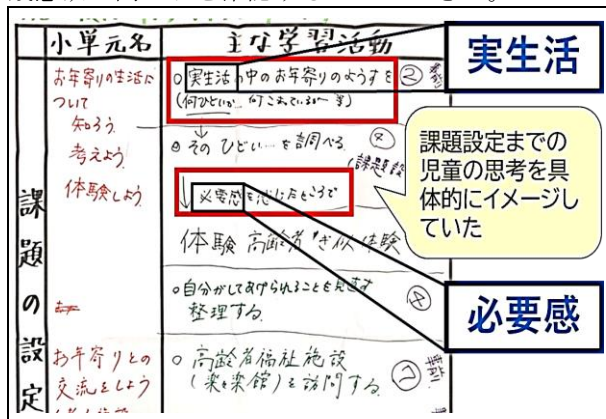


図6 ワークショップ後の場面構想

(2) 「指導計画をより探究的に『みがく』」の実践 大和町立大和中学校と宮城県東松島高等学校の実践

① 内容（大和町立大和中学校）

実践授業に向け、学年部の教員とともに、学習活動を具体的に想定しながら指導計画の見直しを行った。探究的な学習にするためには、大和町に対する興味・関心を持たせることが必要だと考えた。そこで、課題の設定では、大和町に対する気付きや疑問を生徒に発見させたり、町の観光案内所職員や役場職員の話を聞かせたりする時間を設けた。「より良い町にするための考えを提案する」という目的を持たせ、それに向けた情報の収集や整理・分析を行う指導計画とした（表4）。

表4 協働で見直した後の指導計画（一部抜粋）

時数	探究の過程	学習活動
7	課題の設定	オリエンテーション① 大和町について自分が気になることや疑問に思うことを学級で共有する オリエンテーション② 講演会「国恩記とまちづくり」に参加する 大和町をより良い町にするための探究課題を設定する
4	情報の収集	インターネットでの情報収集に加えて、地域の専門家にインタビューを行い必要な情報や資料を収集する
2	整理・分析	より良い町にするための提案に必要な情報を整理する
6	まとめ・表現	地域の専門家や役場職員に自分たちの提案を伝える
1	振り返り	学んだことを振り返り、これからに生かす

② 結果と考察（大和町立大和中学校）

大和町の歴史やまちづくりの現状と課題について講演を聞いたことで、生徒に「町のために自分たちができることを考えよう」という社会参画の気持ちを持たせることができた。そして、目的意識が強くなり、生徒は総合的な学習の時間を楽しみにしたり、「もっと知りたい」と主体的に取り組んだりするような変容が見られた。発表会では、調べた情報だけでなく、自分たちの考えや意見を伝えようとしていた。また、教員も実践を重ねる中で、生徒の実態に合わせて更に指導計画を見直すようになった。

以上のことから、生徒の学習意欲の高まりや思考の連続性・発展性を具体的に想定しながら指導計画を作成していくことが、児童生徒の主体的な学びを引き出すことにつながり、探究的な学習を充実させることが確認できた。

③ 内容（宮城県東松島高等学校）

「自己理解を深めよう」という単元で、生徒は興味・関心に応じた個人探究に取り組んでいる。作成されていた指導計画では、課題の設定などで協働的な学びの場を設けていたが、情報の収集では、協働的な学びの機会は設定していなかった。そのため、グループ内で情報交換する時間を設け、インタビュー形式で生徒が異なった考えや情報収集の方法について触れられるような計画を提案した。しかし、複数の教員で更に見直した結果、インタビュー形式で行うのは難しいという意見から、ワークシートに記述した内容を発表し、その内容に対して質問や意見を伝え合う形式に変更した（図7）。

- 1 ワークシートに自分の探究テーマと解決するために収集した情報やその手段、蓄積の方法、課題の解決に向け困っていることをまとめる
- 2 グループ内で発表し、発表した内容に対して質問や意見を伝え合う
- 3 グループ内発表を聞いて、これからの情報収集などの学習活動に生かせそうなことをワークシートにまとめる

図7 複数の教員で見直した後のグループ内発表の流れ

④ 結果と考察（宮城県東松島高等学校）

情報の収集の過程でグループ内発表をしたことで、生徒は他の生徒が集めた情報や、情報収集の方法を具体的に知ることができた。他の生徒の取組について知ったことで、生徒は自分の学びを確かめることができた。

以上のことから、他者との情報交換や意見交流などの協働的な学びを効果的に取り入れることで、生徒は自己の取組を振り返るとともに、自分の学習活動を見直す機会が得られることが確認できた。

(3) 「児童生徒の伴走者として『はしる』」の実践
気仙沼市立大谷小学校の実践

① 内容

4年「環境」の単元で実践を行った。単元の主活動である「大谷海岸ごみ調査」に向けて、児童の思いを引き出す言葉掛けを工夫し、体験活動に取り組む必要感や学習意欲を高めることにした。また、振り返りシートで児童の学びの状況を把握し、それを基に外部講師の講話内容の一部変更を依頼した。

② 結果と考察

児童の思いを引き出したり、自己決定を促したりするなど言葉掛けをしたことで、児童からは体験活動を望む声が多く上がった。児童はその後、「体験活動に行かせてください」と、校長に願い出たり、外部講師に電話で講話依頼をしたりするなど、積極的に活動に取り組むことができた(図8)。

T:学校行事だけでごみ調査は十分ですか
C:行けるならもう一度海へ行きたいです
C:もう少し詳しく調べないといけない
T:でも、このまま行くと前と同じようなごみ拾いをするだけ
 になってしまうんじゃないかな
C:詳しい人の話を聞いてから調査をしたい
T:詳しい人って、誰がいるのかな
C:〇〇さんがいるので、電話してもいいですか

図 8 教員が児童に掛けた言葉と児童の反応（一部抜粋）

ごみ調査後の振り返りシートの記述内容から、児童の気付きや関心は外国製のごみや大きいごみばかりに向いていることが分かった。

元々予定していた外部講師の講話では「海洋ごみの世界的な問題」を扱う予定だったが、その内容では児童の興味・関心が広がらないと判断し、外部講師と相談の上、内容を一部変更した。その後、児童はごみ調査では気付けなかったマイクロプラスチックの存在やごみが生態系へ与える影響について詳しく知り、驚きの声を上げていた。児童は学習意欲を更に高め、活動を続けた（図9）。

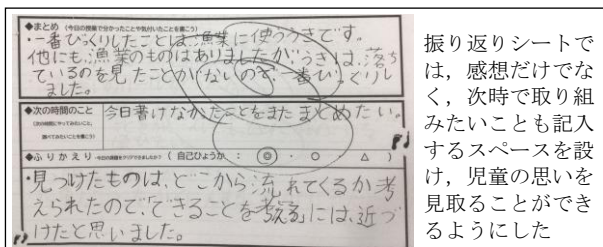


図9 児童の振り返りシートの一部

以上のことから、教員が指導計画の内容を単純になぞるのではなく、児童生徒の興味・関心を引き出すことに努めたり、学習状況を見取りながら適切に計画を修正したりしたことで、学習意欲を継続させたり高めたりすることができたと確認できた。

6 「探究的な学習 教師の3つのアクション」の検証

所属校教員と児童生徒を対象に、事後のアンケート調査を行った。また、研修員と共に指導に当たった教員に対して聞き取り調査を行った。

(1) 教員へのアンケート調査から

「探究的な学習 教師の3つのアクション」に基づくアンケート調査の回答結果は、以下のとおりであった（表5）。

表5 教員へのアンケート調査の回答(自由記述に関する項目のうち一部抜粋)

関する内容 「つかむ」に	・研修会やワークショップは、単元計画作成の参考になった ・児童生徒が主体的に学べるように探究的な学習のプロセスを意識して指導に当たりたい ・一度では「探究的な学習の指導のポイント」を具体的に理解できない
関する内容 「みがく」に	・課題の設定までに相当の時間を要するが、児童生徒が主体的に取り組んでいて良い ・学習意欲を高める活動を単元構想段階でしっかり考えておくことが重要であることが分かった ・考え方や方向性についてはある程度分かったが、実際に単元計画を作成しようとするとはやはり難しい
関する内容 「はしる」に	・考えを引き出す問い掛けをしたり、言葉を補ったりしたことで、全てのグループが課題を書くことができた ・体験活動後の振り返りを基に、児童生徒が進んで自分の課題を持つことができるようにしたい ・児童生徒がやりたいたいことの全てを実現させるためには学校だけでは対応が難しい

「探究的な在り方を『つかむ』」では、「指導計画を見直す時のポイントを理解しているか」を尋ねた質問で「おおよそ理解している」と回答した割合が実践前の19%から48%と約30ポイント増加した。自由記述には「課題の設定からまとめ・表現の流れを意識することが大切だと分かった」「児童生徒が主体的に学べるように探究的な学習のプロセスを意識して指導に当たりたい」などの記述があり、教員の探究的な学習に対する理解の深まりや実践意欲の高まりが確認できた。

「指導計画をより探究的に『みがく』では、「課題の設定までに時間を要するが、児童生徒が主体的に取り組んでいて良い」や「学習意欲を高める活動を単元構想段階で考えておくことが重要だ」の回答があり、指導計画を見直すことの重要性について理解していることが分かった。自分自身で指導計画を見直したり、指導の途中で指導計画を修正したりする様子も確認できた。

「児童生徒の伴走者として『はしる』」では、「伴走者としての役割をどのくらいできているか」を尋ねたところ、実践前は23%、実践後が30%と全体としては意識の大きな変容は見られなかった。しかし、自由記述には「体験活動後の振り返りを基に、児童生徒が進んで自分の課題を持つことができるようにしたい」とあったことから、伴走者としての役割については理解できていることがうかがえる。今回、大きな変容が見られなかったのは、役割については

理解したものの、実践の機会が十分でなかったためと考えられる。また、「児童生徒がやりたいことの全てを実現させるためには学校だけでは対応が難しい」という記述もあり、学習環境を整えるために校内体制を整備したり、地域連携を進めたりすることが必要だと考える。

(2) 児童生徒へのアンケート調査から

児童生徒に行ったアンケート調査の結果、「課題の設定」から「まとめ・表現」の全ての過程において「できた」「どちらかと言えばできた」と肯定的に回答した割合が80%以上であった。また、各探究の過程と単元全体を通して取り組んだことや学んだことについて質問したところ、以下の回答を得た(表6)。

表6 児童生徒へのアンケート調査の回答(自由記述に関する項目のうち一部抜粋)

課題の設定	・初めは悩んだけど、調査に行ったり、講話を聞いたりして課題を決めることができた(小) ・町をより良くするために、他地域の取組についてもっと詳しく調べてみたい(中) ・テーマの決定に苦労したけれど、先生の助言で良いテーマにすることができた(高)
情報の収集	・詳しい人に直接聞いたり、自分たちで実験したりして、情報を集めた(小) ・調べた場所などに行き、確かめたいと思った(中) ・実証実験や人に直接触れることの大切さを改めて知った(高)
整理・分析	・必要な情報を選ぶために、自分の考えをしっかり持って話し合った(小) ・友達が集めた情報を参考にして、より深く分析することが大切だと分かった(中) ・整理・分析を見越しながら、情報の収集をしていくことが大切と気付いた(高)
まとめ・表現	・分かりやすく、ねらいからそれないようにすることが大切と気付いた(小) ・発表を聞く相手のことを考えることができた(中) ・要点など伝えたい部分を大切にしたい(高)
単元全体の振り返り	・自分に何ができるかを考え、行動に起こすことが今までと違うし、大切だと思った(小) ・自分の意見をたくさん出すことができたし、そうした方が良いことを新しく知った(小) ・班で協力することで、意見がまとまった時の達成感があった(中) ・時間はかかるけれど、いろいろな人と成果を共有して、将来、役に立ってほしいと思った(高)

表6からは、児童生徒が自ら進んで学習に取り組んだり、他者と交流しながら学習を進めたりするなど、主体的・協働的に学ぶ記述が見られた。

また、単元全体の振り返りからは、児童生徒が自ら地域や社会と関わろうとする姿勢が見られたり、他者と関わり合いながら課題を解決することの大切さに気付いたりする記述が見られた。これは、児童生徒が総合的な学習（探究）の時間を通して、探究的な学習の良さを実感できたということであり、教員が「探究的な学習 教師の3つのアクション」を実践したことの成果であると言える。

7 研究の成果と課題

「探究的な学習 教師の3つのアクション」を基に、校内研修会で共通理解を図り、指導計画を協働

で見直したり、伴走者としての役割を理解したりした上で指導に当たったことで、主体的・協働的に学ぶ児童生徒の姿を確認することができた。総合的な学習（探究）の時間の本質を理解したことにより、何を大切にし、どのような指導を行えば良いかなど探究的な過程を意識した授業づくりができたと考える。また、指導計画の見直しに着手したことが、総合的な学習（探究）の時間の授業改善を更に推し進めるきっかけになったと考える。

児童生徒の伴走者としての役割については共通理解を図ったが、事後アンケートではできていると回答した教員は少なかった。伴走者としての役割を果たすためには、教員が理論を押さえることに終始するのではなく、児童生徒の主体性・協働性を引き出すことにつながる言葉掛けや関わり方について、実践を重ねる中で支援のイメージを作っていく必要がある。さらに、実践を通して得られた成果を学校全体で共有し、繰り返し取り組んでいくことが必要であると考えられる。

8 おわりに

「探究的な学習 教師の3つのアクション」に基づいた授業づくりを通して、単元計画作成例、指導計画例等を研究成果物としてまとめた。この研究成果物を、児童生徒の主体的・協働的に学び続ける力の更なる育成を目指す一助となるよう普及させ、実践を継続していきたい。

また、学年間や学校間の探究的な学習の積み重ねや教科等横断的な指導が重要であることが分かった。今後はその視点も踏まえながら、他教科でも探究的な学習の充実を図っていきたい。

【注釈】

- *1 「探究的な学習の指導のポイント」とは、平成29・30年に告示された学習指導要領解説総合的な学習（探究）の時間編において、第7章第3節・第9章第3節に示されている「1 学習過程を探究的にすること」と「2 他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること」の二点のことである。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省：「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」、2021
- 2) 文部科学省：「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）」、2022

【図表等の許諾について】

図2、3、4は、教員対象アンケート調査の一部である。図5、9は、所属校での校内研修会の様子と授業実践で児童が記入した振り返りシートの一部である。表1は、県内の学校視察のまとめ、表5、6は実践後に行った教員と児童生徒へのアンケート調査の一部である。研究の目的にのみ使用することで、研究協力校から使用許諾を得た。

主体的・協働的に学び続ける力を育む探究的な学習の在り方

～総合的な学習（探究）の時間での授業づくりを通して～

令和4年度 探究的な学習研究グループ
大和町立大和中学校 中 村 希
気仙沼市立大谷小学校 佐 藤 祐 司
宮城県総合教育センター 永 野 孝 雄

大崎市立東大崎小学校
宮城県東松島高等学校
奥 山 香

高 橋 司
山 岸 崇
齋 藤 未和子

研究目標	児童生徒の主体的・協働的に学び続ける力を育成するための探究的な学習の在り方を、総合的な学習（探究）の時間での授業づくりを通して明らかにし、探究的な学習を充実させるための手立てを提案する。
------	---

背景	・ Society5.0 時代や予測困難な時代を生き抜く力の育成が求められる。 ・ 深い学びを実現するために「習得・活用・探究」という学びの過程を重視する。 〔小・中学校学習指導要領解説（H29 告示）総則編、高等学校学習指導要領解説（H30 告示）総則編〕 ・ 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」〔中央教育審議会答申（R3）〕
----	--

研究計画		アンケート調査	
月	内 容	Q 総合的な学習（探究）の時間で困っていることや難しいと感じていること。 ※ 1人3つまで回答	
4	先行研究の調査 研究構想図作成	自分自身の指導について※	探究的な学習になっていると自信を持って言えない 99人
			教師主導になりがち 74人
			時間的余裕がない 72人
			課題の設定 40人
			情報の収集 8人
			整理・分析 34人
5	アンケート調査内 容の検討	探究の過程 について	まとめ・表現 17人
			話し合う時間や機会の確保が難しい 78人
			ICTの導入、学力向上など、他の優先する課題がある 65人
6	アンケート調査	校内体制について※	年間計画、単元計画の探究的な学習の過程が不十分である 59人
			(n=167) 期間：6/15～7/15

県内の学校視察	
担当者へのインタビュー	総合的な学習（探究）の時間の授業見学 取組や働き掛けについて情報収集

8	県内の学校視察	研究 成果 物 の 作 成	「探究的な学習 教師の3つのアクション」 探究的な学習の在り方を 「つかむ」 指導計画をより探究的に 「みがく」 児童生徒の伴走者として 「はしる」
9	所属校での授業づくり・実践・検証		
10	報告書作成		

授業づくり	
授業実践	校内研修会
「探究的な学習の指導のポイント」を押さえた単元計画の作成 関心や疑問を引き出したり、芽生えさせたりする教師の働き掛け 次時の方向性を持たせるための終末の振り返り	説明とワークショップの実施 実践授業の事後検討会 「探究的な学習の指導のポイント」について情報共有 単元計画の検討・改善

検証方法	
所属校教員に対してアンケート 担任への聞き取り	児童生徒の振り返りやワークシートの記述 活動の見取り 児童生徒に対してアンケート

研究成果物	
探究的な学習 教師の3つのアクション 「探究的な学習の指導のポイント」、単元計画の作成例、指導計画例、県内の取組紹介	

目指す教師像	探究的な学習を実践し、児童生徒の主体的・協働的に学び続ける力を育成する教師
--------	---------------------------------------

目指す児童生徒像	主体的・協働的に学び続ける力を身に付けた児童生徒
----------	--------------------------